

## 沖縄・辺野古の闘いの歴史的意義

宮坂 亨

僕が辺野古に興味をもったのは『週刊金曜日』05年1月14日号を見てからです。「辺野古沖の攻防激化海人も立ち上がった」というモノクログラフィ記事にひかれました。そこで、ネットで情報を集め05年2月17日から3月24日まで辺野古で過ごし新基地建設反対非暴力阻止行動にたずさわりました。

この時のことは『月刊社会教育』05年8月号に「ぼくが見た辺野古」と題したルポを発表させていただきました。また、地元(信州諏訪)でのビデオ上映会やネット上の発言・短歌研究新人賞に「辺野古を守る」30首で挑み佳作になったりと「辺野古」を広めようとしています。今回、社全協の「平和のための学習」分科会で報告をする機会に恵まれ感謝しています。

沖縄の本土復帰以前の1966年、米軍は辺野古に航空基地と軍港を備えた要塞基地建設の計画を立てました。沖縄の負担軽減や「世界一危険な」普天間基地の移設代替案ではなく40年間米軍が温めていた計画を日本の税金で実行しようと言うのが辺野古への新基地建設の本質です。

辺野古の海には天然記念物のジュゴンが棲みます。残数は50頭ほどといえます。ジュゴンは豊かな生態系の象徴です。新基地建設は確実にジュゴンを絶滅へと導くでしょう。工事による騒音や水質悪化・海流の変化はモズクの養殖や漁業など海で暮らしを立てている沖縄本島東海岸の漁民の生活に決定的なダメージを与えます。

辺野古崎にあるキャンプシュワブの海兵隊はベトナムやイラク戦争に参加しています。このことを基地建設反対派のメンバーは「沖縄の罪」と言っていました。日米の権力者に振り回されている沖縄を被害者でなく加害者だと言うのです。そして、基地ができ騒音や事故が怖いと言った被害者意識の反対はあきらめやすい。だが、人殺しに加担したくない、加害者になりたくないと思えばあきらめられなくなると言います。平和を乱す、人を殺す基地建設は倫理的に認められないのです。

辺野古崎には貴重な埋蔵文化財があります。貝塚時

代(2000年前)の遺跡です。また辺野古は沖縄の三大霊所です。基地建設は沖縄の歴史・習俗への挑戦です。

97年12月の名護市民投票では、基地N0の投票結果でしたが、比嘉名護市長は基地建設受け入れを表明してしまいました。直近の06年1月の名護市長選でも当選した島袋市長は辺野古沿岸案には反対が公約でしたが、基地受け入れを表明しました。民主主義が蹂躪されているのです。

米軍新基地建設には1兆円の費用が掛かると言います。また、基地建設の代償としての振興策は1000億円規模にわたります。建設業界は潤うでしょうがほとんどのカネは本土の大企業に流れ込みます。ダムや原発などの大型公共事業と同じ構図です。土木工事は自然破壊と一体になります。

辺野古新基地建設は環境や平和・歴史・経済・民主主義などつまりは人間の尊厳を犯す構造的暴力そのものです。これと真っ向から闘っている反対派の武器が非暴力です。本土の家の床の間には刀を飾るが沖縄の床の間には三線(楽器)を飾る文化があります。辺野古の運動の拠点となっているテント村には「沖縄のガンジー」と呼ばれる阿波根昌鴻さんの写真が掲げてあります。テント村で説明を受ける時も或いは海上阻止行動のミーティングでも必ず確認するのがこの闘いは非暴力の闘いであるということでした。非暴力は不服従です。ヤグラの上でグリーンピースのインド人スタッフは「この闘いはサティヤグラハだ」と言いました。ガンジーの闘いと一緒だということです。

沖縄には在日米軍の75%が集中します。同じ日本人として座視していいのでしょうか。

人間の尊厳を賭け世界最凶の権力、日米政府と闘う辺野古の運動は世界の最先端に位置する歴史的な試みと言えます。